

国 語 科

国語科学習指導案の諸問題について

酒 井 為 久

次頁に掲げる国語科学習指導案の書式は、本校（本学）で研究授業等に使用しているものである。この論文は、その学習指導案の書式を用いて、国

語科学習指導案の諸問題について考察を進めようとするものであり、以下の項目の番号は次頁の学習指導案の書式中の丸数字に合せてある。

序として

定められた一枚の用紙に、一時間の国語の授業を記録し、当事者以外にもその授業の概略が簡単にわかってもらえるような書式はないものだろうか。残念ながら、この問いに対する答えとなるものが見当たらないのが実状である。授業というものを類型化してとらえることの困難さを再認識する次第であるが、一案として、指導案の書式を授業記録として利用する道はないものかと考えたりしている。その材料とするにしても、指導案とは何かをまずもって明確にしておく必要を感じて、本稿を書くことにした。

実際に指導案を作成するのは、教育実習の機会やごく稀に行われる研究授業の時だけであり、指導案の書式について深く考える機会はなく、従って指導案についての検討は、その授業の台本とその授業における実演の関係のみに集中してしまい、その上で、指導案はその授業が他の授業とどう違うか、またはどう違っていったかを究明するための素材として扱われるのが普通である。その他に、指導案はその授業が他の授業と共通している面をより多く提示しているのであり、国語の授業の共通性を究明する素材としてこれ以上のものはないとの観点から見直すことができるのである。

授業に臨む時に準備として、腹案を練るわけであるが、その時の考案の軸となるものには一定の特徴がみられる。国語の授業には他教科にない国語らしさがあり、それに沿って腹案をめぐらしていることは経験上首肯されることである。それが何であるか明確にする緒口を指導案に求めてみたいと考えるのは、指導案のようにして腹案を練ることが多いということと、腹案こそ真の指導案であるとするならば、それがいわゆる指導案とどう異なるのか明らかにしたいということである。

国語の授業を生徒の側に立って個別的・分析的に研

究する方向は、一般化しつつあるように理解しているが、国語の授業を普遍的・総合的な立場から検討し、国語の授業らしさの要因を究明し、教師の指導案や記録方式等に応用してみたいと考える本論述の行き方は、これまでの研究にはあまり例をみないように思う。

1. 計画案について

国語科学習指導案についての、年間計画・月間計画・週間計画という物理的な期限ごとの計画案の立案がなければ、仮りに一時間単位の授業が充実していても、その学年の学習指導目標の効果的な達成はおぼつかなくなるであろう。計画案は、教科書を中心とした教材の年間配分を基準として立案するものであり教材の扱いや生徒の活動は二次的に考えておくものである。案であるから、予定変更の余地を見積っておかねばならないが、生徒の国語の力を一律に一定水準まで引き上げようとする義務教育的国語教育の段階では計画の妥当性が要請されるが、生徒の持っている国語の力に応じてその特性を伸長させようとする高等教育においては計画案の必要性が薄いといえる。中等教育では上級学校への進学対策が計画案を左右する場合があることも承知しておくべきであろう。

略称して、指導案という学習指導案は教師の指導を中心とした授業予定であって、先の計画案とは性格が異なる。単元指導案・教材指導案は、一単元・一教材についての指導案であり、長期にわたる点は計画案的であるが学習指導目標を達成するための方法に裏付けられた計画である点が、学習指導内容の配分である計画案と相違するところである。普通に言う指導案は、一時間単位の授業のものであり、次頁に掲げた書式もそれであるが、生徒の学習活動にまで配慮してある点が特色となってくる。

殊に、国語科では言語活動を学習内容とすることが多いので、生徒の学習活動に対する配慮は他教科以上

に大切な留意点となろう。また、学習を指導するという戦後の経験学習法の建前が名称の上に現存している意義を忘れないようにしたい。

(資料)⑦	(終 分結)	(展 分開)	④ (導 分入)	過 程	国語科学習指導案 ① (指導者) (学年・組) ② (本時の位置) (本時の目標) ③ (本時の内容)
			⑤	学 習 活 動	
			⑥	学 習 指 導	

2. 中学と高校の国語科教育

高校の国語科は、現代国語・古典Ⅰ甲・古典Ⅰ乙・古典Ⅱという科目に分けられているが、中学は国語という教科のみで科目に細分されていない。高校の指導案の見出し書きの部分は、従って科目名にしなければならない。ところで、中学と高校の国語科教育を比較して相違点をまとめると、どういうことが言えるのであろうか。

中学では、言語活動そのものが学習内容となる場合があり、言語習得のための訓練に時間をかける必要があるが、高校では、言語文化財についての学習の比重が増し、言語に関連する知識の理解をより重要に扱うようになる。中学で国語の基礎学力を身につけ、高校で水準量の伝統的な国語の遺産を継承させながら、それらを通して個々の生徒の人間性を啓発しようとするのである。用具教科としての性格から判断しても、国語科は過去を通して現在を見ようとする傾向の教科であるといえよう。

国語科による道徳教育という表現は、理想の人間像を追求するよう理想像についての先入観を設定しからであるが、人間のあるがままの姿を基準にして表現内容による教育、広い意味の文学教育を実施していくことが大切であろう。文学教育論は、文学の側から問題

提示されるか、学校教育論の立場から論議されることが多いが、国語科教育的文学教育論は不可能なのかという課題を、教育課程審議会で国語科に理解領域を設ける方針が示されている現在、これからの研究課題の一つと考えている。

3. 本時の位置と目標

位置の欄は、単元および該当教材を扱う総時間中の何時目であるかを記入する。戦前のように課編成の教材では一課一時間の扱いが可能な場合もあるが、単元編成の戦後においては、学習指導のどの段階の授業であるかを明確にすることが特に大事となる。その詳細を示す場合は、「資料」欄を使用する。

本時の目標の設定は、目標達成度を事後に自己判定できるような具体性をもつと同時に、その時間の根幹となるような総括的なものでありたい。国語科全体の学習指導の目標として、価値目標と言われる表現内容による教育成果を目指す側面と技能目標と言われる表現形式による教育成果を目指す側面とがあるが、そうした目標と各時の目標とは、国語教育理念の実際化である努力目標と教材の中から帰納した到達目標との相違があって直接には結び付かない。しかし、価値目標と技能目標に着目して、本時の目標を設定するのはよい方法であり、目標達成度を測定しうるような項目を

二項目ぐらい箇条書きで示すことになる。

本時の目標は、本時の内容によって展開され、裏付けられるわけであるが、本時の内容のどこに重点を置いているかということの表明になるものでもなければならぬ。この面から考えれば、生徒の学習活動の中心となるものと教師の学習指導の中心となるものとの二項目ぐらいを箇条書きで示すことになる。各時の目標としては、後者の行き方がより適切であり、教室において生徒にも明示しうるものが理想であろう。学年・組欄のもつ実質的な意義がそこにある。

4. 単元学習の過程

本時の内容は、50分の授業展開が一目でわかるように図表形式で表すのである。そのうちの過程欄は、導入・展開・終結に三分割して時間を記入しておくが、これは戦後に普及した単元学習指導法の授業過程に沿った考え方から来ていると思われる。

昭和30年の「小学校学習指導書国語科編」に、単元学習指導法の型として、導入・展開・終末・発展というように示されているのは、生活経験単元や教材単元の学習指導法が定着してきたと理解できるが、その骨子が指導案に生かされているといえるのである。これを単に時間配分に過ぎないと思えるならば、10分ごとの五分割に合せて学習指導計画を立てて、導入・展開・終結等は学習指導欄に記入する方式も有力となるが、学習指導の過程を主体にした授業計画を立てるなら、書式の方式が最適だといえ、教師の指導性の流れが生徒の学習の流れを総括していく形となっている。その切れ目にある縦線は、時間配分に比例させて左右に移動して引くことになる。

問題は、導入と終結とにこだわることである。導入なしに授業の中心部へ進むこともありうる。導入は、授業の場面への動機づけとしての役割りを単元学習の初期には持っていたのであるが、現在は、教材の予備的取り扱いに利用されることが多く、その意味では展開の一部分と理解できるし、終結は、簡単なまとめと次時への予告で十分だともいえる。「過程」欄のあり方は再検討の余地があるように思われる。

ところで、自由選題の作文の時間を想定してみると、一時間の大部分が書くことに費やされて、その前後に若干の指示が入るだけの授業過程となろう。作文についての動機づけ・取材・構想等の学習指導は、前時までに終わらされていようし、推敲・批評などの作文処理は次時以後の作業となるはずである。本時の内容としては、展開に相当する叙述があるだけで、それがすべてとなる。導入は前時・終結は次時であり、単元学習指導法は本来、そうした学習内容のまとまりの扱いを目指していたのである。それを、一時間の授業過程に

取り入れるところに、特に、国語科にあっては無理が生じている。

読解の授業では、文章教材について浅い段階からより深い段階へと読み進んでいくわけで、とりわけ展開と導入・終結の区別が必要なのではない。生徒の学習意欲を高めるための方策として、50分の授業過程を種々変化させ、いくつか区切りを付けていくことが肝要であり、読解の課題を提示し解決していくことの繰り返しの単調さを破る工夫が大切となる。それは、学習活動の欄と学習指導の欄で示されるので、「過程」は時間経過というように物理的な時間の配分だけでもよいと考えている。

5. 学習活動か学習内容か

言語を使うこと、話し聞き理解する活動も国語科の学習内容とするならば、「学習活動」の欄名を他教科のように「学習内容」としない方が妥当になるであろう。この欄は、生徒の学習活動と教材内容とのかかわりを箇条書きで書くところであり、教材内容の列挙中心の書き方を、国語科ではしないのである。文例を展開の部分で示すと、

1. 教材を音読する。
 - ア. 新出漢字の読みに注意する。
 - イ. 句読点でやや長めに間をおくようにする。
2. 教材を読解する。
 - ア. 意味段落に分けてそれぞれに見出しを付ける。
 - イ. 各段落ごとに意味のはっきりしない語句を抜き出し調べる。
 - ウ. 筆者の言おうとしている事柄とその説明の部分とに分ける。
3. 教材を鑑賞する。
 - ア. 自分の考えと違うところを指摘しその理由を考える。

以上のようなものである。実際には、どの教材のどの部分であるかを具体的に書き、例えば、意味段落が三つあるならばその数字を記入したり、筆者の言おうとする事柄を並記しておくのである。音読・読解・鑑賞等の活動が大項目で、教材内容は小項目扱いになるのが国語科的なところである。

文例を検討するまでもなく、学習活動は文章教材の読みの深め方の常法に従っていることが明らかであるが、文章の読みの論理は、通読・精読・味読という様式や主題・構想・叙述などの着眼点で成り立っている。それらの範疇内で学習活動できる読むことの学習指導は、最も扱いやすい領域といえるのであり、生徒の活動中心とはいふものの、観点を変れば教材内容の流れに支配されているということができ「学習内容」その

ものの配列と言えるのである。国語科の学習内容は、学習活動と結びついたものであり、いわゆる訓練教科的性格をもつものであることが、最も国語科的な読みの授業においても指摘できるのである。

文章によって表現されている内容を学習指導する、例えば社会科の授業のような扱いが国語の授業でも行われるが、学習活動の指導の延長として表現内容による教育が自然な形で展開するよう心がけるべきで、学習指導が先行するのは一般的に言って好ましいことではない。生徒の読解活動を中心に据えるべきであるが、読解内容による学習指導が可能であるような価値ある教材を読むことは欠かせない条件となろう。教材選定基準として、生命の尊厳を含めた現実肯定の精神に充ちた内容のものや人間の向上心をめざめさす内容のもの等明るく健康な人間らしさを養う文章が考えられるが、国語科の教材であるからには読解の学習活動にふさわしいものであるという前提条件が必ず存在するのである。

作文の授業については前述したが、話すこと・聞くことの領域の授業について検討してみると、まず、あまりに日常的すぎて取り立てて教材とすべきものが見当らないのである。従って、指導案を書こうとする場合検討するものがなく千差万別の指導案が成り立ちうる。また、授業を省りみてその効果を判定しようとする際の客観的基準が乏しく、授業をやり放しにしたのではないかという指導者の気がかりや逆に授業の効率判定の材料とはならないという気安さがあり、この領域の授業は敬遠される傾向にある。話しことばのよい環境の整備に心がけることが大事で、授業内容として取り扱わなくてもよいのではという意見も一理あり、この領域の指導案はあまり立案されない傾向にある。

6. 学習指導を支える評価

学習指導欄は、学習活動について留意すべき点を簡潔書きにし、学習活動欄と対応するよう書き入れている。教師の側から授業を見る欄である。

学習指導についての実際的な考え方の中で、最も大切なのは、自己反省を含む広い意味での評価に裏付けられた指導を心がけることであろう。計画立案を実践するのであっても、検証しながら先へ進むのが専門的な指導ということになる。評価というと、生徒の学習理解度を客観的な数字で表すものだけを思い浮べるが、授業として目標追求活動をした際の目標達成度を教師が自己判断することをも含めて考えるべきであり、後者の意味の評価を重視したいのである。授業中のいくつかの小目標がこの欄に記入されるわけであり、それらの達成度の評価が、次の時間の指導案へと連っていくのである。

文例を示すと、

1. 呼びかけの部分の調子を出すように工夫させて読ませる。
 - ア. その語の辞書の意味と筆者の使い方との違いに気付かせる。
2. ノートに百字程度で書かせる。
 - ア. 結論をまず書くようにする。
 - イ. 感想を付け加えるとよい。

以上のような書き方となり、教師の発問に近い形の文章を考えればよいことになろう。その発問に対する応答についての評価や、発問と応答の両者についての評価が積み重って一時間の授業の評価となる。

広い意味の評価ができない授業は、目標が明確でない授業である。次に、広い意味の評価が独善に陥っている授業は、目標に妥当性のない授業である。評価は評価だけにとどまるのではなく、何を教えようかと学習指導法を練る段階からすでに始まっているのである。評価が学習指導欄を支えているという理由である。

7. 読書指導への発展

資料欄には、該当時間の資料・主なものとしては教材の文章等を記載するのであるが、授業にふくらましをもたせ、生徒各自の能力に応じて発展的に学習を進めさせるような資料を示す工夫が必要である。一教材を扱った全体的学習が、個別の学習へ応用されるような含みをもつものでありたいという願いである。単的に言えば、読書指導の芽が国語科の授業にはなくてはならないということである。

読書は孤独な個人的作業であり、家庭学習的な場において自発的になされるものであるが、読書への導入の役割を読解の授業がもちたいと考え、その意味で表現内容による指導は徹底されるべきだと思うのである。何となれば、読書は書物との豊かで、自由な対話であり、一方的な価値観の押し付けとなることがなく、普通に言われる表現内容による一斉授業形態による指導が注入主義に傾くのと対照的だからである。

教師が読書指導として成し得ることは、書物の紹介や書物の提供など動機づけの段階の仕事であり、それを主としたテコとして読書に集中させることであろう。時として、強制的に読書させる方式をとらねばならないこともあるが、結果として、読書の習慣・態度を身に付けさせることがねらいとなるのである。読書の習慣や態度の学習指導は生徒の人間性の啓発であり、国語科における人間教育という意義をもつのである。人間教育というと、表現内容に期待される人間像が示されているものを知的に理解させることだと考えるのが普通であり、文学教育もまたしかりとする考え方が一般的だが、これまた価値観の注入主義にすぎず、読

書の習慣や態度を身に付けたものは、自由選択の形で価値観を形成できるはずであり、読書のしつけ的教育こそ人間教育であると思うものである。ただし、拙速主義ではあっても、例えば基本的人権に係わるごときもの見方は、最適な発達段階を選んで教え込んでいかなければならないので、教室で扱う読解教材の表現内容はそうしたものを選んでおくことになる。

結語として

国語教育関係者以外に、国語の授業というものを説明しようとする場合、どのような説明が授業の全体像を余すところなく伝えられるであろうか。百聞は一見に如かずということが真理であって、一見に勝る説明はなかなか困難であろう。しかるに、授業を一見しただけでは理解の及ばない専門性を多くかかえているのが国語の授業であって、国語教育関係者の誇りとするところであるから、そうした国語の授業に関する百聞を一聞にして示すところに国語科教育研究の意味と必要性があると考え、この論を書き進めているのである。指導案は、国語の授業の多くの問題を集約し、一聞として示すために利用できる唯一のものと言ええるのである。

51年度は、椋山女学園大学で国語科教育法、名古屋大学で国語教育法を講じたのであるが、さし当って免許のための単位として受講する学生に、国語科教育の実態を説明する最もよい素材は、やはり指導案であった。国語科教育の実践には、なるほど習うより慣れろという要素が多いけれども、将来父母として国語教育に関与するだけかも知れない多くの学生等に、短時間で国語科教育の全体像を説明するには、こうした方法が最善であると主張するのは、これに勝るものをこれまでの国語科教育研究物に見出し得ないからである。学生ばかりでなく、一般社会人にも国語科の授業というものの真髄をわかりやすく説明できるような、いわば開かれた国語科教育研究をねらいながら、それがまた国語科教育を新しく進展させるものとなるに相違ないと考えている。

椋山女学園大学では、次の大項目に従って講義を進めた。

1. 学習指導案と言語活動

2. 音読と三読法と主題
3. 国語教育の理念と目標
4. 学習指導要領と小・中・高の国語科教育
5. 国語教育史について
6. 発問と授業の諸問題
7. 評価の意義と方法
8. 古典(古文・漢文)の学習指導
9. 国語教育の内容・教材論
10. 文法の学習指導法
11. 現代国語の系列と文学教育
12. 読書指導と言語観

また、講義終了後の試験問題は次の通りである。これらを記して、備忘としたい。

1. 西尾実の国語教育の史的区分を述べよ。
2. 言語過程説とは何か。
3. 音訓表改訂の意義を述べよ。
4. 三読法とは何か。
5. 音読の効用について述べよ。
6. 国語科の価値目標とは何か。
7. 言語活動の領域について述べよ。
8. 備考の漢字とは何か。
9. 評価についての二つの考え方を述べよ。

今後の課題

国語の授業の腹案を練るとき、時間の経過に従って成案していくのであるが、その際、一時間の授業時間をいくつか分割し、それに当てはめて考案しているのが普通であろう。指導案の過程欄④は、生徒の学習面からの一時間の分割であることができ、学習活動欄⑤は、教材内容面からの分割となろうし、学習指導欄⑥は、教師の指導面からの一時間の分割であることができよう。これらを、国語教育史的に、昭和後半期の学習活動指導期・大正期から昭和初期の文学教材研究期・明治期の言語教授期と対応させて解釈することも可能であろう。だから、国語教育史的に見て、国語科学習指導案の今日的な新しい課題は、「本時の目標」を評価と関連づけた形で明確化・系統化することにあると判断している。